

誰が陰キャ・陽キャと名付けられるのかの社会学

松浦, 悟志

市丸, 綾由莉

山口, 由莉

立山, 皓基

他

<https://doi.org/10.15017/7178874>

出版情報 : 九州大学教育社会学研究集録. 27, pp.165-183, 2024-03-15. Seminar of Educational Sociology Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studies Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



誰が陰キャ・陽キャと名付けられるのかの社会学

Sociology of who is labeled Inkyo or Yokya

松浦悟志・市丸綾由莉・山口由莉・立山皓基・長岡大雅・陣内未来・立脇洋介・木村拓也

序章：陰キャ・陽キャとは何か

第1節 問題の所在：陰キャ・陽キャの定義の曖昧さ

人は一人で生きていくことはできず、他者とのコミュニケーションによって自己のアイデンティティを確立している。千島・村上(2015, pp.129)によると、現代の若者は、様々なコミュニケーションの場において、キャラという分かりやすいラベルを使用することで、人間関係を単純化し、コミュニケーションの円滑化を可能にし、居場所を獲得している。そのようなキャラというラベルの代表例である「陰キャ・陽キャ」は、暗いキャラと明るいキャラとに人間のキャラを二分化し、若者のインフォーマルなコミュニケーションの場で多用される。日本語俗語辞書によると、2005年代に「インキャラ」という言葉がネットで広まった。インキャラは陰気なキャラクターの略で陰キャとも言われ、暗い人や家に閉じこもりがちな人という意味で使用される。日本語俗語辞書では、それに加え、実際の性格が暗いか否かに関係なく、クラスやグループの人から嫌われることでいじめられっ子、嫌われキャラといった意味で使用されると補足されている。つまり、はじめはオタクや引きこもりなどのネット用語と関連づけ、性格が内向的でコミュニケーションを取ることが苦手な人が陰キャと呼ばれたのに対し、陰キャというラベルが広く共通して認識されるようになると、実際の性格とは関係なく、人間関係の地位に対して他者からラベルを貼られるようになる。

ここで、陰キャ・陽キャとはその人の性格を指すものなのか、人間関係の位置によって変化するものなのか、陰キャ・陽キャの定義があいまいなまま使われている現状を読み取ることができる。さらに、社会における人間関係の多様化に伴い陰キャ・陽キャを明確に区別し、定

義することが困難になっている。具体的には、家族、学校などの既存の共同体に加え、SNSの普及はオンライン上でのコミュニケーションを可能にし、見知らぬ人と共通の趣味について話すことができるほど人間関係形成の場を大きく拡張させた。陰キャ・陽キャとは単に二項対立で分けられるものではなく、その実態においてグラデーションが存在するのではないか。

第2節 先行研究の状況：陰キャ・陽キャの性格的視点と文脈的視点

陰キャ・陽キャに着目した先行研究はあまり見られない。理由として、陰キャ・陽キャという概念自体が現代に特有のものであることが考えられる。藤野(2020, pp.38)は、瀬沼の書籍で、キャラという言葉は1999年以降に青年の友人関係において現れ始めたと指摘し、バラエティ番組などに見られるようなキャラを介した人間関係が現実の友人関係に取り入れられることで定着したと論じている。そのことから、キャラの分類である陰キャ・陽キャは比較的新しい概念であり十分な研究がなされていないといえることができる。

陰キャ・陽キャの根本といえることができる研究には、「スクールカースト」がある。石川(2014)は、スクールカーストの副作用として陰キャラを配分されるメンバーが常に生じ、いじめなどの温床となることを指摘した。このように、スクールカーストでは上位を陽キャ、下位を陰キャと定義される。鈴木(2010)は、スクールカーストとは、教室内の生徒の「人気」の高低を要因として、生徒の人間関係に序列構造を生み出し、それが教室内の生徒間で共有されることによって、明確な「身分の差」となって表れる現象であるとし、公立中学校を対象に質問紙調査によって分析した。その結果から、自己主張力、同調力がスクールカーストに影響するが、共感力は影響を与えず、

容姿はスクールカーストに大きく影響することを明らかにした。これを踏まえ、須藤(2014)は、今の思春期社会ではグループ間のコミュニケーションはほとんどなく、「同調」関係を中心にグループ内で世界が完結していると述べた。さらに、現代の子供たちが、グループに居場所を求め、狭い範囲の人間関係に気を遣い、自らを所属グループに固定化させるのは、自身の核が乏しく、不安定な自身の自己確認を行っているためではないかと考えた。

一方、別の角度で陰キャに視点を当てたのが知念(2017)である。知念は社会学研究の中で先駆けて陰キャに焦点を当てた研究を行った。その研究では、〈インキャラ〉という解釈枠組みに着目して、〈ヤンチャな子ら〉という集団の境界が構築される過程に、どのように男性性が組み込まれているのかを男子高校生のフィールドワークにより分析し、ジェンダーと教育に新たな知見をもたらした。ここでは、以下の三点を明らかにしている。第一に、〈インキャラ〉とは具体的な人物と対応する生徒類型というよりも、人々の言動や実践を解釈していく文脈的枠組みであった。第二に、〈インキャラ〉という解釈枠組みは、適用対象や文脈に応じて様々な意味を帯び、人々のジェンダー実践を規制するものであった。すなわち、〈インキャラ〉を自らに適用する場合は「親密性」を確認させる機能、男子に対する攻撃としては侮辱・攻撃・批判といった実際上の意図を実現する機能、女子に対しては、他者を「真面目に相手するに足らぬ者」と規定する機能が考えられた。第三に、学年が上がるにつれてそうした解釈枠組みに対して、異議申し立てが行われるようになった。特に、他者を〈インキャラ〉と呼び、あからさまに攻撃/嘲笑することは「子ども」とみなされるようになった。具体的に、〈ヤンチャな子ら〉のなかでも〈インキャラ〉を頻繁に攻撃/嘲笑していた生徒は、小・中学校時代にいじめられた経験を持っており、浪人経験があつて年齢が一つ上であるにもかかわらず、集団内の地位は周辺的であったという特徴がみられた。

先行研究をまとめると、従来、陰キャ・陽キャはスクールカースト下位、上位という社会的地位としてとらえられ、簡単に動くことはできないものとみなされていた。しかし知念は、適用対象や文脈によって〈インキャラ〉が様々な意味を帯びるその実態を明らかにした。現在の課

題として、質問紙調査による量的研究を手段として、コミュニケーションの相手や場面に応じて行動が変化するような陰キャ・陽キャの違いともいえる実践的、具体的な様相を明らかにする研究は行われていないといえることができる。本研究では、スクールカースト研究で行われたような自己主張力や同調力などの性格因子が、自認するキャラにどのような影響を与えるのかを明らかにするとともに、コミュニケーション場面に着目して陰キャ・陽キャにどのような違いがあるのかを考察する。陽キャに焦点を当てた研究や、自認する陰キャ・陽キャと性格の関係性、SNS上のコミュニケーションとの関連性について明らかにすることは、現代の若者の友人関係を把握するうえで新しい視点を与えるものである。

第3節 本研究の課題：陰キャ・陽キャは何によって分けられるのか

陰キャと陽キャとでは実際にどのような性格の差があるのか、性格以外にどのような要因によって分けられるのか、陰キャ・陽キャがそれぞれどのようなコミュニケーションの特徴を持つのかについて、自認する性格や小学校時の経験など様々な視点から検討していく。

第4節 本研究の論証方法

(1) 本研究における調査の概要

本研究では、大学生を対象に Google フォームで「大学生の性格と人間関係に関する調査」というアンケート調査を行い、分析に用いるデータを得た。アンケート期間は2023年7月から10月の4か月間である。全調査対象者数は147人、そのうち有効回答者数は、1件の不適切な回答を除いた146人（男性68人、女性77人、その他1人）であった。

(2) 質問項目の内容

質問項目は、被調査者の属性を問う8項目、和田(1996)のBig Five尺度⁽¹⁾の外向性を中心とする10項目を含む性格に関する15項目と菅原(1984)の自意識尺度⁽²⁾5項目の計20項目、小学生時までの親のしつけに関する5項目、橋本(1997)の対人ストレスイベント尺度⁽³⁾を小学生時までの対人関係に関するマイナス経験として用いた5項目、プラス経験5項目、学校生活に関する11項目、SNSの

使用状況に関する質問5項目、コミュニケーションに関する質問5項目を相手や人数といった状況の異なる7パターンで聞いた内容(5×7.35項目)で構成されている。以下表0にて、本研究の各質問項目の概要を示す。

表0. 大学生を対象とした質問紙調査の質問項目の概要

変数名	説明
性別(男性ダミー)	質問1-1 あなたの性別を選んでください。「1.男性」を1、「2.女性」を0としている。
所属大学	質問1-2 あなたの大学を選んでください。「1.九州大学」と「その他」で尋ねている。
学年	質問1-3 あなたの学年を選んでください。「1.学部1年」を1、「2.学部2年」を2、「3.学部3年」を3、「4.学部4年」を4とし、「5.大学院生」(2名)を欠損値とした。「その他」で「学部5年」と答えた者を5、「学部6年」と答えた者を6としている。
学部(大学院)	質問1-4 あなたが所属している学部(大学院)を記述でお答えください。
中学生時代の部活(中学時代の運動部ダミー)	質問1-5 中学校で経験した部活を選んでください(複数選択可)。「1.入っていない」、「2.運動部」、「3.文化部」の形で尋ね、「1.入っていない」、「3.文化部」を0、「2.運動部」を1としている。
高校生時代の部活(高校時代の運動部ダミー)	質問1-6 高校で経験した部活を選んでください(複数選択可)。「1.入っていない」、「2.運動部」、「3.文化部」の形で尋ね、「1.入っていない」、「3.文化部」を0、「2.運動部」を1としている。
居住形態	質問1-7 あなたの居住形態を選んでください。「1.一人暮らし」、「2.実家」、「3.シェアハウス」、「4.その他」の形で尋ねている。
きょうだいの有無(兄弟ダミー)	質問1-8 あなたのきょうだいの有無について一つを選んでください。「1.いない」を0、「2.いる」を1としている。
陰キャ・陽キャ度の自己評価	質問1-9 あなたは自分のことをどの程度、陰キャ・陽キャにあてはまると思いますか。最もあてはまるものを一つを選んでください。陰キャとは、性格が暗く、引っ込み思案で内気な人を指し、陽キャとは、性格が明るく、人づきあいが好きで活発な人を指します。1を陰キャ、7を陽キャとし、1~7の間で当てはまるものを選んでもらった。
①明るい	質問2-1 「以下のそれぞれの項目はあなた自身にどれくらいあてはまりますか。非常にあてはまる~まったくあてはまらないの5段階で、自分に最もあてはまると思うものを一つ選んで下さい。」において、「5.非常にあてはまる」を5「4.ややあてはまる」を4「3.どちらとも言えない」を3「2.あまりあてはまらない」を2「1.まったくあてはまらない」を1として得点化した。
②外向的	
③自分の意見を伝えられる	
④自己肯定感が高い	
⑤リーダーシップがある	
⑥緊張しやすい	
⑦目立ちたくない	
⑧悪く思われたくない	
⑨感情表現豊か	
⑩人によく見られたい	
⑪変化を恐れない	
⑫まわりに関心がない	
⑬ネガティブ	
⑭地味	
⑮人に合わせる	
①ふと、一歩離れた所から自分をながめてみることもある	質問2-2 「あなたにあてはまるものを一つを選んでください。」において、「5.非常にあてはまる」「4.ややあては
②しばしば、自分の心を理解しようとする	
③自分についてのうわさに関心がある	

④人の目に映る自分の姿に心を配る	<p>まる」「3.どちらとも言えない」「2.あまりあてはまらない」「1.まったくあてはまらない」の5件法</p>	
⑤自分が他人にどう思われているのか気になる		
①勉強態度や成績について叱られることが多かった		
②親からは頻繁に褒められた方だ		
③周りの友人が持っているゲーム機などを買ってもらえなかった		
④親から否定されたように感じる 때가あった		
⑤遊びに行くとき、行く場所や帰る時間について制限があった		
⑥知人との付き合い方が分からなくなった		
⑦友達と会話中、何を話したらいいか分からなかった		
⑧友達が自分のことをどう思っているのか気になった		
⑨友達から疎外されていると感じることがあった		
⑩知人が非常識な行動をした		
⑪新しい環境で、自分から話しかけ友達になることができた		
⑫心の底から信頼できる友達がいた		
⑬友達と過ごす時間は楽しかった		
⑭困っているときに友達に助けももらった		
⑮放課後や休み時間に友達とみんなでよく遊んだ	<p>質問3-1 「小学生までの自身の経験について最もあてはまるものを一つ選んでください。」において、「5.非常にあてはまる」を5「4.ややあてはまる」を4「3.どちらとも言えない」を3「2.あまりあてはまらない」を2「1.まったくあてはまらない」を1として得点化した。</p>	
①これまでの学校生活において、クラスや部活、サークルなどでリーダー的存在になることが多い		
②自分の運動技能に対して自信がある		
③自身の芸術作品を人に見られることに抵抗がない		
④嫌い、或いは苦手を感じる人が少ない		
⑤大学では友人と一緒に昼ごはんを食べることが多い		
⑥面白いことがあって笑う時には、口を開けて大きく笑う		
⑦一日の間で鏡を見て容姿を整える機会が頻繁にある		
⑧母校への愛校心が高い		
⑨友達が多い		
⑩異性の友だちが多い		
⑪学校行事には積極的に参加した		
		<p>4-1 「以下のそれぞれの項目はあなた自身にどれくらいあてはまりますか。」において、「5.非常にあてはまる」「4.ややあてはまる」「3.どちらとも言えない」「2.あまりあてはまらない」「1.まったくあてはまらない」の5件法</p>
	<p>質問5-1 「あなたのLINEの友達は何人ですか。最も当てはまるものを一つ選んでください。(公式・親類を除く)」において、「0.使用していない」、「1.0-30」、「2.31-50」、「3.51-100」、「4.101-150」、「5.151-200」、「6.201-300」、「7.301-500」、「8.それ以上」の9件法</p>	
LINEの友達の数 (公式・親類を除く)		

Instagram の投稿頻度(ストーリー含む)	質問 5-2 Instagram の投稿頻度(ストーリー含む)はどの程度ですか。最も当てはまるものを一つ選んでください。(アカウントを複数所有している場合は最も多いもの)において、「0. アプリを入れていない・ほとんど使っていない」、「1. 見るだけ」、「2. 月に1~2回程度」、「3. 週に1~2回程度」、「4. それ以上」の5件法
Instagram のフォロワー数	質問 5-3 あなたの Instagram のフォロワー数は何人ですか。最も当てはまるものを一つ選んでください。(アカウントを複数所有している場合は最も多いもの)において、「0. 使用していない」、「1. 0-50」、「2. 51-100」、「3. 101-200」、「4. 201-300」、「5. 301-400」、「6. 401-500」、「7. 501-1000」、「8. それ以上」の9件法
Twitter の投稿頻度	質問 5-4 Twitter の投稿頻度はどの程度ですか。最も当てはまるものを一つ選んでください。(アカウントを複数所有している場合は最も多いもの)において、「0. アプリを入れてない・ほとんど使っていない」、「1. 見るだけ」、「2. 月に1~2回程度」、「3. 週に1~2回程度」、「4. それ以上」の5件法
Twitter のフォロワー数	質問 5-5 「あなたの Twitter のフォロワー数は何人ですか。最も当てはまるものを一つ選んでください。(アカウントを複数所有している場合は最も多いもの)」において、「0.使用していない」「1.0-50」「2.51-100」「3.101-200」「4.201-300」「5.301-500」「6.501-1000」「それ以上」の8件法
初対面の人との1対1	質問 6 「○○での会話における、あなたの態度として最もあてはまるものを一つ選んでください。」において、①自分から話しかけることが得意②聞き手になることが得意③相手と意見が違う場合でも自分の意見を主張することが得意④相手の目を見て話すことが得意⑤相づちを打ちながら話を聞くことが得意の質問に対する、「5. 非常にあてはまる」「4. ややあてはまる」「3. どちらとも言えない」「2. あまりあてはまらない」「1. まったくあてはまらない」の5件法
初対面の3-4人でのグループ	
友達との1対1	
家族との1対1	
異性との1対1	
顔見知り陽キャとの1対1	
顔見知り陰キャとの1対1	

第1章：陰キャ・陽キャの再分類

第1節 因子分析

本節では、続く第2節でのクラスター分析で使用する

変数作成のため、因子分析を行う。使用する変数は、表1の質問2-1の15項目である。ある選択肢に対象者の75%以上が集中している項目がないことを確認した。項目ごとの平均値、標準偏差は表1に示す通りである。

表1 自分の性格の記述統計量

項目	平均値	標準偏差
①明るい	3.308	1.093
②外向的	2.973	1.254
③自分の意見を伝えられる	3.527	1.181
④自己肯定感が高い	3.062	1.340
⑤リーダーシップがある	3.014	1.232
⑥緊張しやすい	2.212	1.205
⑦目立ちたくない	2.651	1.074
⑧悪く思われたくない	1.938	1.158
⑨感情表現豊か	3.397	1.206
⑩人によく見られたい	4.123	.909
⑪変化を恐れない	3.274	1.177
⑫まわりに関心がない	2.849	1.222
⑬ネガティブ	2.740	1.215
⑭地味	2.733	1.091
⑮人に合わせる	2.342	1.047

性格を測定するための15項目について、因子分析を行った結果、固有値1以上の因子が4つ認められた。スクリープロットについては図1の通りであり、固有値の推移は第1因子から順に4.519、2.301、1.299、1.055...である。スクリープロットや解釈可能性を考慮し、最終的に3因子を抽出することが適当であると判断した。いずれの因子にも高い負荷量をもたない7項目を削除して、再度因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。この再度行った因子分析の結果を表2に記す。因子抽出後の共通性の値が極端に低い項目はない。

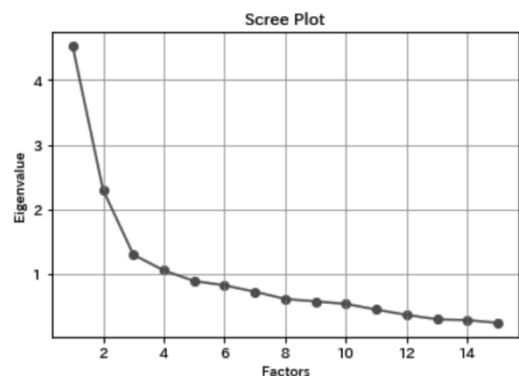


図1 性格のスクリープロット

第1因子は、「地味ではない」「明るい」「外向的」「感情表現豊か」といった項目が高い因子負荷量を示しており、外向性に関する項目群だといえる。そこでこの因子について「外向性」因子と命名する。クロンバックの α 係数については.79であり、内部一貫性を有したものだといえる。

第2因子は、「自分の意見を伝えられる」「リーダーシップがある」といった項目が高い因子負荷量を示しており、リーダー性に関する項目群だといえる。そこでこの因子について「リーダーシップ」因子と命名する。クロンバックの α 係数については.77であり、内部一貫性を

有したものといえる。

第3因子は、「悪く思われたくない」「人に合わせる」といった項目が高い因子負荷量を示しており、相手の顔色をうかがうことに関する項目群だといえる。そこでこの因子について「相手の様子をうかがう」因子と命名する。クロンバックの α 係数については.60であり、内部一

貫性を有したものといえる。なお、第1因子と第2因子の因子間相関は.501、第2因子と第3因子の因子間相関は.110、第1因子と第3因子の因子間相関は.248であった。

以上の因子分析の結果を踏まえて、抽出した3つの因子を因子得点として、今後の分析に用いていく。

表2 自分の性格の因子分析の結果

	第1因子 ($\alpha=.79$)	第2因子 ($\alpha=.77$)	第3因子 ($\alpha=.60$)	共通性	平均値	標準偏差
明るい	.911	-.045	-.197	.669	3.308	1.093
地味	.670	-.074	.034	.629	2.733	1.091
外向的	.619	.257	.001	.877	2.973	1.254
目立ちたくない	.550	-.039	.187	.698	2.651	1.074
感情表現豊か	.432	.182	-.047	.566	3.397	1.206
自分の意見を伝えられる	-.068	.945	.035	.912	3.527	1.181
リーダーシップがある	.215	.599	-.029	.786	3.014	1.232
悪く思われたくない	.180	-.199	.814	.795	1.938	1.158
人に合わせる	-.172	.241	.560	.628	2.342	1.047
因子間相関	1.000	.501	.110			
		1.000	.248			
			1.000			

因子抽出法：最尤法、プロマックス回転。第1因子：外向性、第2因子：リーダー性、第3因子：相手の様子をうかがう

第2節：クラスター分析

本節では、続く第2章でのロジスティック回帰分析で使用する従属変数作成のため、クラスター分析(Kmeans)を行う。使用する変数は1節で作成した「外向性因子」、「リーダーシップ因子」、「相手の様子を伺う因子」、「自意識因子」の4つである。分析にはKmeansを使用し、2クラスターへの分類を試みた。Kmeansのパラメーターについては、シルエット係数を指標としたグリッドサーチ等によりチューニングを行った(表3)。それぞれのクラスターについて、各変数の平均値を示したものが、表4であり、分布を散布図に示したものが、図2である。これらの結果から、平均値が高いクラスター(図2において、丸で表示したもの)を陽キャ、平均値が低いクラスター(図2において、四角で表示したもの)を陰キャ

のクラスターとする。

表3 クラスター分析パラメーター

init (初期化方法)	k-means++
max_iter (最大イテレーション回数)	550
tol (収束基準)	.0001

表4 各変数の平均値 (クラスターごと)

	陽キャ (○)	陰キャ (□)
外向性	1.73	1.28
リーダーシップ	2.05	1.22
相手の様子を伺う	1.15	.99
自意識	1.95	1.92

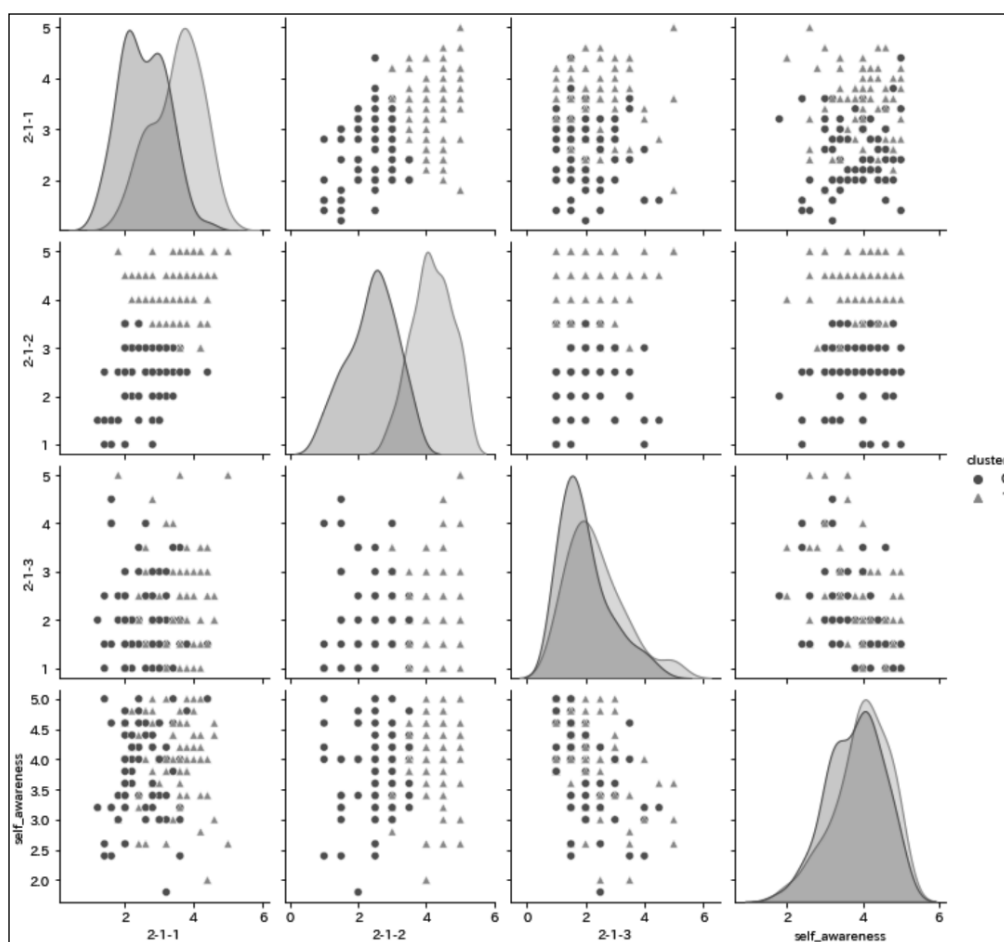


図2 散布図

第2章：陰キャ・陽キャの規定要因分析

第1節 陰キャ陽キャに、小学生時代の友人関係や親子関係は関係するのか？

第1項 問題・目的

本節では、小学生時代の経験が、大学生時代に陰キャになるのか陽キャになるのかに影響するのか検討する。大学生時代の陰キャ・陽キャのキャラクターは、中学生時代や高校生時代から変化しにくいと考える。そこで、キャラクターが決まるのは、小学生時代なのではないかと考えた。キャラクターを形成する外的要因としては、家庭や学校、社会の関係や環境が挙げられる。本論では、小学生時代の親との関係や友人関係が、自分が認識する自己のキャラクターに影響するのかを見ていく。

第2項 因子分析

使用する変数は、表0の質問3-1の15項目である。ある選択肢に対象者の75%以上が集中している項目がないことを確認した。項目ごとの平均値、標準偏差は表5に示す通りである。このデータから因子分析を行っていく。

表5 小学生時代の経験の記述統計量

項目	平均値	標準偏差
①勉強態度や成績について叱られることが多かった	4.089	1.089
②親からは頻繁に褒められた方だ	3.644	1.137
③周りの友人が持っているゲーム機などを買ってもらえなかった	3.000	1.390
④親から否定されたように感じる時があった	3.651	1.295
⑤遊びに行くとき、行く場所や帰る時間について制限があった	2.432	1.286
⑥知人との付き合い方が分からなくなった	3.507	1.239
⑦友達と会話中、何を話したらいいか分からなかった	3.616	1.211
⑧友達が自分のことをどう思っているの気になった	2.788	1.345
⑨友達から疎外されていると感じることがあった	3.192	1.294
⑩知人が非常識な行動をした	3.425	1.248
⑪新しい環境で、自分から話しかけ友達になることができた	3.521	1.210
⑫心の底から信頼できる友達がいた	3.781	1.218
⑬友達と過ごす時間は楽しかった	4.384	.833
⑭困っているときに友達に助けてもらった	3.952	1.039
⑮放課後や休み時間に友達とみんなでよく遊んだ	4.185	1.044

小学生時代の経験について尋ねた 15 項目を用いて、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。因子分析の結果、固有値 1 以上の因子が 4 つ認められた。スクリープロットについては図 3 の通りであり、固有値の推移は第 1 因子から順に 4.016、2.282、1.419、1.016 である。図 2-2 のスクリープロットや解釈のしやすさから、最終的に 3 因子を抽出することが適当であると判断した。なお、項目の削除基準として、因子負荷量.40 未満および共通性.16 未満を設定した。

探索的因子分析を行ったところ、「知人が非常識な行動をした」の因子負荷量が基準を満たさなかった。そこでこの 1 項目を削除して因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。この再度行った因子分析の結果を表 6 に記す。

第 1 因子は「友達と過ごす時間は楽しかった」や「困っているときに友達に助けてもらった」など友人関係に関する 5 項目が高い因子負荷を示していたため、「友人

関係のプラスの経験」因子と命名した。クロンバックの α 係数については.66 であり、内部一貫性を有したものといえる。

第 2 因子は「知人との付き合い方が分からなくなった」や「友達と会話中、何を話したらいいか分からなかった」など交友関係に関する 4 項目が高い因子負荷を示していたため、「友人関係のマイナスの経験」因子と命名した。クロンバックの α 係数については.77 であり、内部一貫性を有したものといえる。

第 3 因子は「勉強態度や成績について叱られることが多かった」や「親から否定されたように感じる時があった」など親子関係に関する 5 項目が高い因子負荷を示していたため、「親のしつけ」因子と命名した。クロンバックの α 係数については.77 であり、内部一貫性を有したものといえる。

なお、第 1 因子と第 2 因子の因子間相関は.22、第 2 因子と第 3 因子の因子間相関は.42、第 1 因子と第 3 因子の因子間相関は.24 であった。

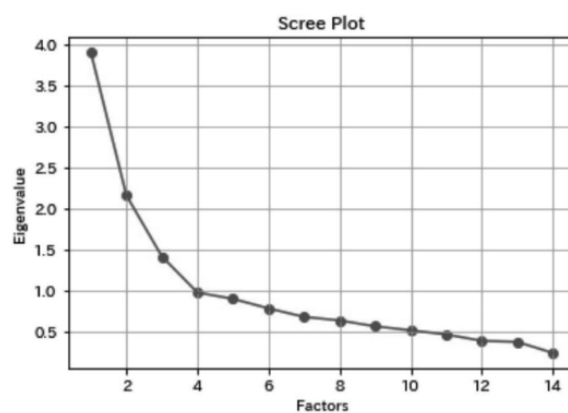


図3 小学生時代の経験のスクリープロット

表6 小学生時代の経験の因子分析の結果

項目	第1因子 ($\alpha=.66$)	第2因子 ($\alpha=.77$)	第3因子 ($\alpha=.77$)	共通性	平均値	標準偏差
⑬友達と過ごす時間は楽しかった	.759	.034	.048	.841	4.384	.833
⑮放課後や休み時間に友達とみんなでよく遊んだ	.722	.125	-.236	.611	4.185	1.044
⑭困っているときに友達に助けてもらった	.697	-.232	.210	.676	3.952	1.039
⑫心の底から信頼できる友達がいいた	.588	-.050	.118	.655	3.781	1.218
⑪新しい環境で、自分から話しかけ友達になることができた	.465	.116	-.186	.395	3.521	1.210
⑥知人との付き合い方が分からなくなった	.024	.808	.031	.863	3.507	1.239
⑦友達と会話中、何を話したらいいかわからなかった	.153	.690	.149	.992	3.616	1.211
⑨友達から疎外されていると感じることがあった	.035	.591	-.021	.605	3.192	1.294
⑧友達が自分のことをどう思っているのか気になった	-.097	.486	.097	.486	2.788	1.345
①勉強態度や成績について叱られることが多かった	-.049	.092	.557	.600	4.089	1.089
⑤遊びに行くとき、行く場所や帰る時間について制限があった	-.118	.036	.533	.451	2.432	1.286
④親から否定されたように感じる時があった	.048	.196	.524	.768	3.651	1.295
③周りの友人が持っているゲーム機などを買ってもらえなかった	-.011	-.019	.459	.429	3.000	1.390
②親からは頻繁に褒められた方だ	.297	-.056	.405	.646	3.644	1.137
因子間相関	第1因子 第2因子 第3因子	1.000 -0.220 1.000	-0.240 0.420 1.000			

因子抽出法：最尤法、プロマックス回転。第1因子：友人関係のプラスの経験、第2因子：友人関係のマイナスの経験、第3因子：親のしつけ

第3項 相関分析

次に、自認するキャラと、過去の友人関係や親子関係との関係を検討するために相関分析を行った。自認するキャラについては「あなたは自分のことをどの程度、陰キャ・陽キャにあてはまると感じますか。」という質問に対し、1を陰キャ、7を陽キャとする7段階評定とした。分析の結果は表7に示す。

自認するキャラは「友人関係のプラスの経験」と正の相関を示した ($r=.309, p<.001$)。

自認するキャラと「友人関係のマイナスの経験」は、負の相関を示し ($r=-.215, p<.01$)、「親のしつけ」は有意な相関は見られなかった ($r=-.189, p<.05$)。

表7 小学生時代の経験とキャラクターの相関係数

	陽キャ度
友人関係のプラスの経験	.309 ***
友人関係のマイナスの経験	-.215 **
親のしつけ	-.189 *

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$

第4項 考察

以上の分析を踏まえて、大学生時代に陰キャであるのか陽キャであるのかに、小学生時代の友人関係や親子関係が関連しているのかについて考察する。

自認するキャラと「友人関係のプラスの経験」の相関

係数は.309($p<.001$)であり、正の相関が見られた。この結果から、大学生時代に陽キャであることと小学生時代における友人関係のプラスの経験の関連性が示唆される。しかし、小学生時代に友達と楽しい時間を過ごしたり、困ったときに助けてもらったりしたといったプラスの経験が陽キャになる要因となるのか、あるいは大学生の時に陽キャの人は、小学生時代から外向的で、友達と良く過ごしていたため、得点が高かったのかは明らかではない。

一方で、自認するキャラと「友人関係のマイナスの経験」の相関係数は-.215($p<.01$)であり、弱い負の相関を示した。このことから、大学生時代に陰キャであることと小学生時代に友人関係においてマイナスの経験をしたことの関連性が示唆された。

親のしつけの厳しさと陽キャの度合いは統計的に有意な結果とはならなかったが、相関係数の値が負であることから、大学生時代に陰キャ寄りであることと小学生時代に親のしつけが厳しかったことが関連する可能性がうかがわれる。陰キャは侮辱・攻撃・批判する機能や「真面目に相手するに足らぬ者」と規定する機能があるとされ、陰キャをマイナスに捉えている人も多いと考える。親に褒められる経験が少なかったり、よく叱られたりしていたことで、自己肯定感が低くなり、自分のキャラを低く評価しているといった可能性が考えられる。自己肯

定感とキャラの関連については今後さらに検討を行う必要があるだろう。

行い、コミュニケーション場面の違いが陰キャ・陽キャの分類にどれだけ影響を与えるかについて検討をする。

第2節 陰キャ・陽キャの特徴と規定要因に関する分析

第1項：問題・目的

陰キャ・陽キャというキャラクターの特徴は、そのレベルが人との関わりの中で認識されるものである以上、コミュニケーションの場において最も強く現れると考えられる。しかし、コミュニケーションと言っても、相手にする人数の違い、コミュニケーション相手との関係性の違い等、様々な条件によって状況は大きく異なる。例えば友人に対しては陰キャ・陽キャに関係なく円滑なコミュニケーションが取れるが、初対面の人だとその差ははっきりと現れるという想像が容易いように、状況によって表出するコミュニケーション力には差があり、その差が陰キャ・陽キャの分類に与える影響力には違いが生まれると推測できる。

そこで本節ではまず第1章第2節で行ったクラスター分析の結果を従属変数としてロジスティック回帰分析を

第2項：主成分分析

本項では Q6 のコミュニケーションについて尋ねた項目について主成分分析を行い、ロジスティック回帰分析で使用するための独立変数を作成する。Q6 では、「初対面の人との1対1」「初対面の3-4人でのグループ」「友達との1対1」「家族との1対1」「異性との1対1」「顔見知りの陽キャとの1対1」「顔見知りの陰キャとの1対1」という場面ごとの会話における自身の態度を①自分から話しかけることが得意、②聞き手になることが苦手、③まわりと意見が違う場合に自分の意見を主張することが得意、④相手の目を見て話すことが得意、⑤相づちを打ちながら話を聞くことが得意のそれぞれ5つの回答項目で尋ねた。また、②聞き手になることが苦手は逆転項目として扱っており、分析に際して調整済みである。

以下、各場面の主成分分析の結果である。

表8 Q6-1 初対面の人の1対1との会話における自身の態度の主成分分析

	第1主成分
④相手の目を見て話すことが得意	.799
①自分から話しかけることが得意	.785
⑤相づちを打ちながら話を聞くことが得意	.732
③まわりと意見が違う場合に自分の意見を主張することが得意	.403
②聞き手になることが苦手	-.180
固有値	1.985
寄与率	.397

表9 Q6-2 初対面の3-4人でのグループの会話における自身の態度の主成分分析

	第1主成分
①自分から話しかけることが得意	.832
④相手の目を見て話すことが得意	.814
⑤相づちを打ちながら話を聞くことが得意	.642
③まわりと意見が違う場合に自分の意見を主張することが得意	.616
②聞き手になることが苦手	.113
固有値	2.159
寄与率	.432

表10 Q6-3 友達との1対1の会話における自身の態度の主成分分析

	第1主成分
④相手の目を見て話すことが得意	.782
⑤相づちを打ちながら話を聞くことが得意	.758
①自分から話しかけることが得意	.716
③まわりと意見が違う場合に自分の意見を主張することが得意	.663

②聞き手になることが苦手	-.435
固有値	2.328
寄与率	.466

表 11 Q6-4 家族との 1 対 1 の会話における自身の態度の主成分分析

	第 1 主成分
⑤相づちを打ちながら話を聞くことが得意	.876
④相手の目を見て話すことが得意	.864
①自分から話しかけることが得意	.782
③まわりと意見が違う場合に自分の意見を主張することが得意	.650
②聞き手になることが苦手	-.090
固有値	2.557
寄与率	.511

表 12 Q6-5 異性との 1 対 1 の会話における自身の態度の主成分分析

	第 1 主成分
④相手の目を見て話すことが得意	.821
⑤相づちを打ちながら話を聞くことが得意	.794
①自分から話しかけることが得意	.739
③まわりと意見が違う場合に自分の意見を主張することが得意	.626
②聞き手になることが苦手	-.254
固有値	2.308
寄与率	.462

表 13 Q6-6 顔見知りの陽キャとの 1 対 1 の会話における自身の態度の主成分分析

	第 1 主成分
③まわりと意見が違う場合に自分の意見を主張することが得意	.711
①自分から話しかけることが得意	.703
⑤相づちを打ちながら話を聞くことが得意	.652
④相手の目を見て話すことが得意	.621
②聞き手になることが苦手	.548
固有値	2.111
寄与率	.422

表 14 Q6-7 顔見知りの陰キャとの 1 対 1 の会話における自身の態度の主成分分析

	第 1 主成分
④相手の目を見て話すことが得意	.845
⑤相づちを打ちながら話を聞くことが得意	.766
①自分から話しかけることが得意	.693
③まわりと意見が違う場合に自分の意見を主張することが得意	.517
②聞き手になることが苦手	-.148
固有値	2.071
寄与率	.414

全ての場面において第 1 主成分は全般的に高い値を取っており、全般型ということが出来る。一部、②の値が負であったり、かなり小さい値を取っていたりするが、これは聞き手になることの得手不得手が他の項目に比べ、重みがないということであろう。反対に「顔見知りの陽

キャとの 1 対 1」では②も他の場面に比べて高い値になっており、これは陽キャとのコミュニケーションにおいては、よく話す陽キャに対して聞き手になるという行為が、他の自分から話すことを測るような項目と同様に大きな要素になっているのではないかと推測できる。今後、この第 1 主成分を場面ごとに「初対面の人との 1 対 1」

「初対面の3-4人でのグループ」「友達との1対1」「家族との1対1」「異性との1対1」「顔見知りの陽キャとの1対1」「顔見知りの陰キャとの1対1」と呼ぶ。

第3項：ロジスティック回帰分析

本項では、第1章第2節で示したクラスター分析の結果を従属変数として、ロジスティック回帰分析を行う。

クラスター分析によって陰キャを0、陽キャを1とした結果を従属変数にし、「性別(男性ダミー)」「学年」「文系ダミー」「中学時代の運動部ダミー(1:運動部,0:文化部,帰宅部)」「高校時代の運動部ダミー(1:運動部,0:文化部,帰宅部)」「兄弟ダミー(1:いる,0:いない)」の属性、そして前項で作成したコミュニケーション場面ごとの「全般型」主成分7つ、全体で13つを独立変数とした。その分析の結果が以下の表15である。

表15 クラスター分析の結果を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果

	B	p	SEB	オッズ	
切片	-4.758	.022	*	2.084	.009
男性ダミー	.013	.977	.47	1.014	
学年	-.087	.686	.216	.916	
文系ダミー	.789	.101	.481	2.202	
中学時代の運動部ダミー	-.76	.130	.502	.468	
高校時代の運動部ダミー	.616	.229	.512	1.851	
兄弟ダミー	.174	.794	.666	1.19	
初対面の人との1対1	-.065	.656	.145	.937	
初対面の3-4人でのグループ	-.117	.283	.109	.889	
友達との1対1	.024	.837	.118	1.025	
家族との1対1	.281	.009	**	.107	1.324
異性との1対1	.017	.873	.106	1.017	
顔見知りの陽キャとの1対1	.387	<.001	***	.098	1.472
顔見知りの陰キャとの1対1	-.156	.061	+	.083	.856

注：+： $p<.1$ ，*： $p<.05$ ，**： $p<.01$ ，***： $p<.001$

分析の結果、 $\chi^2=54.931$ ， $p<.001$ ，McFaddenR2=.273から十分なモデルの当てはまりが確認された。また、AUC=.830，感度が.731，特異度が.718，精度が.743，正確度が.729であり、中程度の予測精度が確認された。

そして「顔見知りの陽キャとの1対1」(B=.387, $p<.001$)、「家族との1対1」(B=.281, $p=.009$)、「顔見知りの陰キャ

との1対1」(B=-.156, $p=.061$)のそれぞれが有意な結果を得た。「顔見知りの陽キャとの1対1」は係数が.387と正の影響が認められ、逆に「顔見知りの陰キャとの1対1」では係数が-0.156と負の影響が認められ、「顔見知りの陰キャとの1対1」の主成分得点が1上がると陽キャであるオッズが0.844倍になることが示された。これは普段から陽キャは陽キャと、陰キャは陰キャとコミュニケーションを取ることが多いため、このような結果になるのではないかと推測できる。普段から陽キャとよく話す人、つまりそれは陽キャが多いコミュニティに属しているということであり、そのような場に身を置けている人は自身も陽キャである可能性が高い。その逆も然りであり、陽キャ・陰キャという分類において属するコミュニティは、自身の属性の反映という点でも、自分が普段から落ち着いていられる環境はどこかという点でも重要な要素になる。「家族との1対1」も有意であり、正の影響が認められたが、これは日常的に家族とのコミュニケーションが取れている人は、家庭以外の場所でも日常的にさまざまな人とコミュニケーションを取り、いろいろな場所に関係を持ちうるのではないかと推測する。また、統計的に有意な結果ではないが、「友達との1対1」の係数が小さく、友達とのコミュニケーションに陽キャ・陰キャは大きく影響しないという仮説通りの結果になったものの、「異性との1対1での会話」の係数が同じく0に近いというのは、陽キャの方が異性とも話すため影響も大きくなるという仮説とは大きく異なる点であり興味深い。同じように統計的に有意な結果ではないが、「文系ダミー」と「高校時代の運動部ダミー」の係数が正に大きく、理系より文系の方が、帰宅部・文化部より運動部の方が陽キャに近いという大方の想像を裏切らず仮説通りの結果になりうるということが読み取れる。一方で、「中学時代の運動部ダミー」は負の係数になっており、これはかなり興味深い点と言える。中学時代と高校時代でなぜこの違いが生まれたのか、中学時代はスポーツが部活動以外にクラブでの活動も盛んであり、本来運動部群に属するはずの人が帰宅部・文化部だと回答した可能性等が考えられるが、あくまで想像の範疇を出ることはない。本研究はサンプルが少ない中行われていることもあり、より大きなサンプルサイズを確保した上で、今後改めて検討を

行っていく必要があるだろう。

終章: 誰が陰キャ・陽キャと名付けられるのか

第1章では外向性・明るさ・周りへの関心等の性格に関する心理尺度を因子分析し、3つの因子を抽出した。その後、作成した3因子を軸にクラスター分析を行い、全データに陰キャ・陽キャのラベルを与えた。

第2章ではまず、過去の経験と陰キャ・陽キャの関連を検討するために、相関分析を行った。

次に、人数や相手の異なるコミュニケーションの場における、コミュニケーションの取り方について主成分分析を行い、その後ロジスティック分析によって陰キャ・陽キャの規定要因やその特徴についての分析を行った。その結果、陽キャは陽キャ同士、陰キャは陰キャ同士のコミュニティを形成していること、また陽キャは日常的に家族とのコミュニケーションを取ることで、家庭以外の場所でも日常的にさまざまな人とコミュニケーションを取り、いろいろな場所で関係を持つことができているのではないかということが推察された。

先行研究においては、陰キャ・陽キャという分類は文脈に依存してなされるものとされてきたが、本研究では、陰キャ・陽キャの詳細な属性について分析し、結果としてコミュニティの形成の仕方、また家族との日常的なコミュニケーションの有無によって陰キャ・陽キャを決定づけられるのではないかと、という新たな視点を導くことができた。そのように考えると、陰キャ・陽キャとは特定の一人を見て名付けられるものではなく、3、4人が集ったグループの中で、誰とコミュニケーションをとっているかに対して名付けられる社会的なものであるといえる。

<注>

(1)ただし、実際には堀・山本(2010, pp.123-128)を参考に作成している。

(2)ただし、実際には堀・山本(2010, pp.47-51)を参考に作成している。

(3)ただし、実際には堀・松井(2008, pp.4-8)を参考に作成している。

参考文献

- 知念渉, 2017, 「〈インキャラ〉とは何か—男性性をめぐるダイナミクス—」『教育社会学研究』第100集, pp.325-345
- 千島雄太, 村上達也, 2015, 「現代青年における“キャラ”を介した友人関係の実態と友人関係満足感の関連—“キャラ”に対する考え方を中心に—」『青年心理学研究』26, pp.129-146
- 藤野遼平, 2020, 「「キャラ」を通じた友人関係における友人グループの影響について: 心理的適応と居場所の観点から」『大阪大学教育学年報』25, pp.37-49
- 橋本剛, 1997, 「大学生における対人ストレスイベント分類の試み」『社会心理学研究』13, pp.64-75
- 堀洋道・松井豊, 2008, 「心理尺度集III 心の健康をはかる〈適応・臨床〉」, サイエンス社, pp.4-8
- 堀洋道・山本真理子, 2010, 「心理測定尺度集I人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉」, サイエンス社, pp.47-51, pp.123-128
- 石川洋明, 2014, 「「キャラ」論・再考、あるいはポストモダンにおける自己形成をめぐる試論」『人間文化研究』第20号, 名古屋市立大学大学院人間文化研究科
- 鈴木翔, 2010, 「「スクールカースト」とは何か?—首都圏の公立中学生を対象とした質問紙調査の分析から—」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』, pp.196-197
- 須藤春香, 2014, 「友人グループを通してみる思春期・青年期の友人関係」『神戸女学院大学論集』第61巻 第1号, pp.114-126
- 菅原健介, 1998, 「自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み」『心理学研究』55, pp.184-188
- 和田さゆり, 1996, 「性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成」『心理学研究』67, pp.61-67

B. Bernstein の言語コード論と社会関係資本論の関係性を巡る計量社会学研究

—N. Lin の地位想起法へのスパース主成分分析の適用—

キーワード 言語コード論、社会関係資本、地位想起法、スパース主成分分析、多変量解析

教育システム専攻
陣内 未来

1. 本論文の構成

序章：教育社会学の定説としての Bernstein 言語コード論と、その実証研究の不在

- 第1節 問題の所在
- 第2節 先行研究
- 第3節 本研究の課題
- 第4節 本研究の分析視点と論証方法
- 第5節 本研究で扱うデータ

第1章：Bernstein の言語コード論による児童の作文に対するクラスター分析

- 第1節 限定コード/精密コードの操作的定義
- 第2節 クラスター分析による児童の作文の分類
- 第3節 小括

第2章：Lin の地位想起法による社会関係資本のスパース主成分分析

- 第1節 本研究における社会関係資本論
- 第2節 Lin の地位想起法と、その分析上の課題
- 第3節 分析に用いる社会関係資本データとスパース主成分分析
- 第4節 スパース主成分分析の適用に際する留意点と妥当性
- 第5節 小括

第3章：限定コード/精密コードの規定要因分析

- 第1節 クラスター内の属性分析と、変数間の相関分析
- 第2節 多項ロジスティック回帰分析
- 第3節 小括

終章：日本語における言語コード論とその規定要因としての社会関係資本

- 第1節 日本的言語コードの導出と規定要因としての社会関係資本

第2節 今後の課題—精密コードI群とII群は等価なのか、段階的なのか

2. 本論文の概要

序章：教育社会学の定説としての Bernstein 言語コード論と、その実証研究の不在

1)問題の所在 Bernstein の言語コード論を巡る限界

言語を文脈依存的な限定コードと文脈独立な精密コードに分ける言語コード論は B. Bernstein によって提唱され、代表的な再生産論の一つとされてきた。しかし、それと同時に、言語コード論には課題も多く、特にその存在証明が不可能ではないかという点において大きな限界も指摘されてきた (例えば、小内 1995)。その後 1970 年頃を境に Bernstein は言語の側面を希薄化させながらコード論の精緻化を図っていったが、一方で様々な研究者によって言語コードの実証研究が進められてきた。それでは、その存在証明の厳しさが指摘されつつも、如何に実証研究が展開されてきたのだろうか。

2) 先行研究 言語コード論を巡る国内外の実証研究

言語コード論を巡っては国内外で様々な実証研究が行われてきたが、多くの先行研究が個人の属性 (出身階級：労働者/中産階級、等) を基に言語の群間差を検討するアプローチをとってきた。しかし、Bernstein は言語コードを文脈依存/文脈独立という観点で定義しており (Bernstein 訳書,1981, pp.107-124)、決してある属性を持つ人々によって用いられるが故に限定コード/精密コードと定義されるわけではない。その上で、言語コードを規定する社会的変数との関係性の解明が Bernstein の根本的な関心であった。

この言語コードの規定要因を検討したのが前馬 (2011) であった。前馬 (2011) は言語コード (限定コード/精密コード) を操作的に定義し、多変量解析による規定要因分析を行っており、言語の表出を規制する構造を明らかにするという言語コード論の理論的定義により沿ったア

アプローチであった。その後、言語コード論の更なる展開が呼びかけられたものの、日本語を対象とした言語コード論の実証的研究は十分に行われてこなかった。

3) 本研究の課題 社会関係資本を手掛かりとした言語コードの規定要因分析

以上を踏まえ、本研究では小学校児童の言語コードに対する規定要因分析、特に社会関係資本に着目した分析を行う。

前馬 (2011) では考察において親子の関わりを論じているが、この点は Coleman (1988=2005) の提唱する家庭内社会関係資本として読むことができる。そこで本研究では前馬の議論をさらに進め、社会関係資本と言語コード論の関係性を見ることで、言語コード論の更なる理解を推し進める。また、日本では教育と社会関係資本の関係性を巡る議論が進んでいない点が指摘されており、本研究において代表的な再生産論の一つである言語コード論と社会関係資本の対応を検討することは社会学・教育社会学上、意義が大きい。

4) 本研究で扱うデータ

以上の課題を検討するため、本研究では「親子の会話を与える『思考力』『判断力』『表現力』育成への影響に関する調査」のデータ (木村ほか, 2023) を用いた。このデータは児童の作文課題の回答結果に加え、児童の社会的背景などを尋ねた児童質問紙の結果と、保護者の児童に対する接し方等を尋ねた保護者質問紙の結果が結びついている。その為、上述した課題を検討するのに適していると考えた。

第1章 Bernstein の言語コード論による児童の作文に対するクラスター分析

第1章では言語コードの定義と、各作文の分類を行った。分類の指標には学習指導要領を基に、小学校6年間の間に児童が国語の「書く」で習う事項を用いた。作文データに対して形態素解析を行い、文法、漢字、資料の引用の有無を基にクラスター分析 (K-Means 法) を行った結果、児童の作文は限定コード、精密コードI群 (高度な感想文型)、精密コードII群 (学習事項積極活用型) の3つに分類された。

限定コード群は小学校で習う文法事項や漢字の使用頻度が他の群と比較して少ない一方で、動詞「思う」の使用回数は高い。また、課題資料への言及が殆どの作文で見られないため、文章全体が文脈依存的 (課題の内容を読み手が知らないとなぜそのような文章が書かれたの

か分からない) であった。精密コードI群 (高度な感想文型) では約9割の作文で資料の言及が行われている点が特徴的であると共に、係助詞の「は」、動詞の「思う」がよく使われていた。その為、精密コードI群は感想文ではあるが、資料の引用によって文脈独立となる「高度な感想文」であるとともに、渡辺 (2007) が日本的として示すような共感型の作文であることがうかがえた。精密コードII群 (学習事項積極活用型) は文法事項・漢字の使用頻度が3群の中で最も高く、小学校の学習内容を網羅的に扱うことを試みた作文と考えられた。また、実際の作文を検討してみると、事実文と感想文の区別が明確で、その区別は文法事項の積極的な活用に支えられている為と理解することができた。そのため、精密コードII群は「学習事項積極活用型」であると判断した。

Bernstein の言語コード論では、限定コードと精密コードの2項対立的に論が展開されていた。そのため、前馬 (2011) においても主語と格助詞を基に作文データを2群に分類していた。本章においては、渡辺 (2007) に示されるような作文教育の日本の特徴の指摘を踏まえ、Bernstein の2項対立的図式は踏まえつつも、精密コードをさらに2つに分類することを試みた点が特徴的である。その結果、精密コードI群 (高度な感想文型) という、いわば日本型とも言い得る精密コードの存在を示唆することができた。このことは多様な指標を基に分類を行った本研究ならではの示唆である。

第2章 Lin の地位想起法による社会関係資本のスパース主成分分析

第2章ではまず、Coleman (1998=2005) と Lin (2001=2008) の社会関係資本を概観した。Coleman にとって社会関係資本とは緊密な関係性の中に内在する資源であり、家族はそのような緊密な関係性の一つとして扱われる。そして、両親が保持する人的資本は家族内の社会関係資本によって子供に伝達されるものとされていた。これまで、Coleman の社会関係資本論は、教育学において社会関係資本を論じる際にしばしば理論的支柱とされてきた一方で、その緊密性による社会関係の閉鎖性が批判されていた。それに対して Lin (2001=2008) は閉鎖的な関係性のみならず、開かれた関係性にも着目し、そのような広範な社会関係の中で個人が如何に社会的な地位を参照し、如何なる目的を有して資本の獲得に臨むのかを理論化した。そしてその測定法が地位想起法 (Position Generator) であった。

本研究では、従来用いられてきた Coleman の枠組とみと、その批判を踏まえた Lin の枠組みの両方を用いて言

語コード論の規定要因分析を行う。その際、Lin の社会関係資本の測定法である地位想起法は調査法上、得られるデータがスパース性を帯びる点を指摘した。その上で、スパースなデータの合成法の一つである、スパース主成分分析 (Zou et al, 2006) を適用した。分析の結果、「友人・知人の非高威信職業従事者⇔家族の高威信職業従事者」「高威信職業従事者」「化学・金属・製鉄」「農林漁業従事者」「警察官・消防士・自衛官 (家族)」の5つの主成分に合成することができた。

以上、Lin の地位想起法のデータ上の課題を明らかにし、これまで社会科学で用いられることのなかったスパース主成分分析を適用することでこの課題を克服した点は本研究第2章における独自の示唆である。

第3章 限定コード/精密コードの規定要因分析

第3章では第1章で検討した言語コードに対する規定要因分析を行った。

なお、回帰分析に投入した独立変数は、児童と家庭の属性変数 (性別・学年・新聞購読・通塾)、保護者の認識する社会関係資本 (Coleman 型) として「子どもを褒めることに自信がある」「子どもを褒める頻度が多い」「子どもと社会について話すことが多い」、保護者の認識する社会関係資本 (Lin 型) として「友人・知人の非高威信職業従事者⇔家族の高威信職業従事者」「高威信職業従事者」「化学・金属・製鉄」「農林漁業従事者」「警察官・消防士・自衛官 (家族)」、保護者の文化資本として「新聞」「本」「マンガ」を読む頻度、児童の能力に対する自己認識として「考える力」「考えをまとめる力」「考えを伝える力」に対する自信、児童が認識する社会関係資本 (Coleman 型) として「いつもお父さんから褒めてもらっている」「いつもお母さんから褒めてもらっている」「社会のことについてお父さんと話している」「社会のことについてお母さんと話している」、児童の文化資本として「新聞」「本」「マンガ」を読む頻度、計25変数を投入している。

分析結果として最も興味深いのが、精密コードI群 (高度な感想文型) においてはLin の社会関係資本変数が効果を示す一方で、精密コードII群 (学習事項積極活用型) においてはColeman の社会関係資本変数が効果を示している点である。

社会関係資本に着目すると、精密コードI群 (高度な感想文型) に対しては第2章のスパース主成分分析で合成した「農林漁業従事者」が正に有意な効果を、「友人・知人の非高威信職業従事者⇔家族の高威信職業従事者」が負に有意な効果を示していた。一方で精密コードII群 (学

習事項積極活用型) に対しては「社会のことについてお母さんと話している」が正に有意な効果を、「社会のことについてお父さんと話している」が負に有意な効果を示していた。

精密コードI群 (高度な感想文型) は渡辺 (2007) が指摘するような、児童の体験を基にした共感型の作文を書くクラスターであった。その為、幅広い社会関係資本を有する家庭の児童が様々な経験を得ることができ、児童の感想も豊かになり、この群に属していると考えられる。今回の例ではば、農林漁業従事者が社会関係に組み込まれている母親の子どもは、自然を体験する機会に恵まれているのではないかと考察した。また、母親の家族内に高威信職業従事者がいることで、児童はそのような人々による良質な社会関係資本を得ることができ、精密コードI群に属する確率が高まったと考えられた。

一方で、Coleman 型の家庭内社会関係資本は児童が学校で学習したことを定着させる方向に働くことが示唆される。すなわち、親子のコミュニケーションのなかで、児童が学校での学習事項を積極的に活用しているのかもしれない。特に、学校での学習事項は社会のことについて話す場合に活用しやすいものと考えられるため、そのようなコミュニケーションの習慣が、作文能力に現れ、精密コードII群 (学習事項積極活用型) に属する確率が高まったのではないだろうか。

終章 日本語における言語コード論とその規定要因としての社会関係資本

Bernstein が1950年代に構想・提唱した言語コード論は、日本では小学校1年生を対象とした前馬 (2011) において始めて操作的に定義され、主語と格助詞に着目した分類がなされた。しかし本研究のように小学校高学年以降を対象とする場合、日本語特有の文字種の複雑さ (平仮名、カタカナ、漢字) や、修得が目指される文法体系、さらには日本の作文教育に特徴的とされる「経験を基にした共感型作文」 (渡辺, 2007 など) という特徴から、精密コードはさらに「高度な感想文型」と「学習事項積極活用型」の2つに分けて理解されるべきである。このことが本研究の成果であり、前馬 (2011) を乗り越えた知見と言える。2つの精密コードはBernstein が指摘するような文脈依存/文脈独立という観点からすれば、どちらも文脈独立的な文章ではあるが、質的な違いは勿論のこと、その規定要因も大きく異なる。

前者の精密コードI群 (高度な感想文型) はいわば感想文の為、読者にとって「情景として」文脈独立なのである。課題文献が引用されることに加えて主語が明確であ

ることから、読者は児童の作文の趣意（課題文献を通して児童が何をどう感じたのか、という感想文）を明瞭に認識することができる。そしてそのような、児童の経験や感想が豊かに現れる文章の背景には、家庭が有する幅広い社会関係から得られる社会関係資本の影響が示唆される。Bourdieu (1984) は社会関係資本の役割を経済資本や文化資本の増幅器として捉えるが、高度な感想文型の精密コードは、そのような他者の持つ経済・文化資本が社会関係資本を媒介して児童に伝達した結果として現れたものといえる。この点は親の読書頻度を除いて、親と子どもの文化資本が精密コードI群の獲得に影響を及ぼしていないことから、他者との関係性に埋め込まれた資本（社会関係資本）の重要性が強調され得る。

一方で、後者の精密コードII群（学習事項積極活用型）の作文は「作文技術として」文脈独立である。即ち、文法的に正確性の高い文章であり、かつ漢字を用いることで意味の曖昧性が排除され、読者に文章全体の意味が理解されやすくなっている。そしてそのような文章が書ける背景には児童の認識する家庭内社会関係資本によって児童が学校での学習事項を日常の中で活用できることが影響していると示唆される。その為、外部性が強調される精密コードI群に対してII群は家族構造の内部性が強調されており、環境要因の側面が強いと言えるだろう。

精密コードI群とII群の規定要因が家族構造の外部性と内部性で分かれる点は再生産論上、重要な論点となる。Bernstein は言語コードについて、労働者階級が限定コードを用い、中産階級が限定コードと精密コードの両方を用いるという環境による決定論的な概念として論じていた（小内, 1995）。しかし、本研究で示唆された2種類の精密コードの議論は言語コードが必ずしも環境決定的ではないことを示唆する。

というのも、Lin の整理によれば、社会関係資本論は一般的に、新資本理論の一部として「資本化の過程で展開される個々人の行為と構造的な地位との相互作用を強調」（Lin, 2001=2008, p.22）している点が重要であった。その際、Coleman は緊密な関係性を強調し、家族という関係性はその一つであった。しかし、関係性を家族内に限定することは必然的に Bernstein が想定するような環境決定因による宿命論を想起させる。一方で、Lin は緊密な関係性のみにとらわれない、広範な社会関係を想定し、社会関係を階層横断的に理論化（そしてその測定法としての地位想起法の開発）することで、階層間移動を可能にする議論を展開している（Lin, 2001=2008）。

本研究においても、精密コードII群は Coleman 型の家庭内社会関係資本に規定され、Bernstein が指摘するよう

な家庭環境による決定論的な性格を持つ一方で、精密コードI群は家庭内に留まらない外部との繋がりから得られる社会関係資本に規定されていた。そのため、日本においては精密コードI群が存在することにより、階級の再生産が生じにくい構造が存在する可能性がある。

以上を総括すれば、本研究が明らかにした精密コードの2側面とその規定要因としての社会関係資本論という枠組みは、従来の環境決定因による平板な再生産論としての言語コード論を乗り越え、社会構造の中における個々人の関係性・主体性をも含めた、より複合的で立体的な言語コード論として提示されるのである。

5) 主要参考文献

- Bourdieu, Pierre, 1986, "The Form of Capital", J.G. Richardson ed., *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, Greenwood Press, pp.241-258.
- Bernstein, Basil, 1971, *Class, Codes and Control Volume I, Theoretical Studies towards a Sociology of Language*, Routledge. (萩原元昭[編訳], 1981, 『言語社会化論』明治図書) .
- Coleman, James S., 1988, "Social Capital in the Creation of human Capital", *American Journal of Sociology*, 94, Supplement, pp.S95-S120, The University of Chicago (= 吉本圭一[訳], 2005, 「人的資本形成に関わる社会的資本」, 住田正樹・秋永雄一, 吉本圭一[編訳] 『教育社会学—第三のソリューション—』九州大学出版会, pp.91-120).
- 木村拓也・陣内未来・坂巻文彩・徳永真直・西郡大・中世古貴彦, 2023, 「『新聞を読む習慣による学力向上』を巡る計量分析—新聞を媒介にした親子コミュニケーションの変化と学力との関係性に注目した多変量解析—」 『九州大学大学院教育学研究紀要』 25号, pp.27-70.
- Lin, N., 2001, *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge university Press (=筒井淳也ほか[訳], 2008, 『ソーシャル・キャピタル 社会構造と行為の理論』, ミネルヴァ書房)
- 前馬優作, 2011, 「日本における『言語コード論』の実証的検討：小学校入学時に言語的格差は存在するか」 『教育社会学研究』, 88, pp.229-250.
- 小内透, 1995, 『再生産論を読む—バーンズティン、ブルデュー、ボールドズ=ギンティス、ウィリスの再生産論—』 東信堂.
- 渡辺雅子, 2007, 「日・米・仏の国語教育を読み解く：『読み書き』の歴史社会学的考察」 『日本研究』 35, pp.573-619.

Zou, H., Hastie, T. & Tibshirani, R., 2006, "Sparse Principal Component Analysis", *Journal of Computational and graphical Statistics*, 15, 265-286.